

Michinoku Art Pilgrims Camp 2016



東北から思考する、 新進芸術家・企画者養成集中ワークショップ

> レポートブック Report Book

<del>▗</del><del>▗</del>┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼┼

# みちのくアート巡礼キャンプ 2016

Michinoku Art Pilgrims Camp 2016

東北から思考する、

新進芸術家・企画者養成集中ワークショップ

\*\*\*\*\*\*

レポートブック Report Book

<del></del>ĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸĸ

- /02////みちのくアート巡礼キャンプとは/
- (03) プログラム概要
- (04)(()()講師、スタップ→覧
- 06 ///キャンプ参加者一覧
- --\\\\\**[レポート]**
- 08 / 合宿ワークショップ
- 18///・中間ワークショップ/
- 24///最終プレゼンテーション/講評/
- 36 ハワークショップを終えて
  - B 総評「媒介するもの」相馬千秋
- 39 開催概要

みちのくアート巡礼キャンプは、2015年より開始した

[1] 東北を知る、巡る [2] 東北から問いを立てる [3] それを自分の表現や企画へと発展させる

ことを主眼とした一カ月集中ワークショップ。

対象は、東北で今後なんらかの活動を志すアーティスト、企画者たち。

震災がもたらした亀裂や揺らぎを、まだ見ぬ表現へと繋ぐために、ともに東北から思考します。

POINT

「巡礼」を テーマにした フィールドワーク、 ワークショップ

本ワークショップでは、芸術表現と東北を切り結ぶテーマとして「巡礼」を掲げる。ワークショップ自体が複数の訪問地を移動しながら開催され、そこで行われる議論や創作も「巡礼」をキーワードに展開される。

POINT

表現ジャンル不問、 東北から 問いを立てる

本ワークショップでは、あえて表現ジャンルを問わない。「東北から問いを立てる」ことに重心をおき、フィールドワークやリサーチはもちろん、民俗学者、社会学者、芸術家らを招いてのディスカッションを集中的に行う。

POINT

成果発表は 未来のプラン、 優秀プロジェクトは 実現へ

本ワークショップの成果発表は、 実作の提示ではなく、未来の作品やプロジェクトのプランを発表する形をとる。 優秀プロジェクトは、実際に東北での実現に向けて動き出すよう、講師や事務局がサポートを約束。

# 8/3(水)-7(日)

# 合宿ワークショップ

東北学の提唱者である民俗学者·赤坂憲雄氏による 特別講義や、複数の講師による集中ワークショップ を開催。

8月3日(水)

場所:宮城県塩竃市 講師:赤坂憲雄

8月4日(木)

場所:宮城県塩竃市 講師:小野和子、いがらしみきお

8月5日(金)

場所:宮城県美里町 講師:志賀理江子

場所:宮城県南三陸町 講師:山内明美

8月6日(土)

場所:宮城県南三陸町 講師:山内明美

場所:岩手県陸前高田市

講師:小森はるか+瀬尾夏美、畠山直哉

8月7日(日)

場所: 岩手県陸前高田市 講師: 相馬千秋、畠山直哉

8/8(月)-25(木)

# 個別リサーチ

合宿ワークショップで掴んだものを起点に個別リサーチやフィールドワークを展開し、作品プランや企画プランへと発展させる。

場所:各自自由に選択

8/15(月), 16(火)

# 中間ワークショップ

中間ワークショップでは、そのプロセスを講師陣が 個別にフォローアップし、さらに受講生同士が相互 批評し合う。

場所:福島県福島市

講師:窪田研二、高嶺格、相馬千秋

8/26(金)-28(日)

# 最終プレゼンテーション/講評

ディスカッションやリハーサルを経てブラッシュアップされたブランを一人ずつプレゼン。講評の場には、ワークショップ講師陣に加え東北各地で活動する文化事業関係者らが出席し、プラン実現に向けた具体的なアドバイスや逆提案で応答。

[リハーサル]

8月26日(金) 12:00-19:00

会場: 塩竈市杉村惇美術館

講師:窪田研二、高嶺格、相馬千秋

[一般公開]

8月27日(土) 17:00-21:00

8月28日(日) 13:00-17:00

会場: 塩竈市杉村惇美術館

講師:赤坂憲雄、窪田研二、高嶺格、

畠山直哉、相馬千秋

#### 講師陣

## 赤坂憲雄 Akasaka Norio

民俗学者、学習院大学教授、福島県立博物館館長



1953年、東京生まれ。東京大学文学部卒業。民俗 学、日本思想史を専攻。1999年『東北学』を創刊。 著書に、「岡本太郎の見た日本」(岩波書店)、「東北 学/忘れられた東北」(講談社学術文庫)ほか多数。

## いがらしみきお Igarashi Mikio



1955年宮城県加美町に生まれる。1979年デ ビュー。1983年『あんたが悪いっ』で漫画家協会 賞受賞。1988年「ぼのぼの」で講談社漫画賞受 賞。1998年『忍ペンまん丸』で小学館漫画賞受

賞。2010年宮城県芸術選奨。2015年「羊の木」で文化庁メディア 芸術祭漫画部門優秀賞受賞。『ぼのぼの』は1993年と2003年に劇 場用アニメ映画化、1995年と2016年にテレビアニメ放送。1997 年『忍ペンまん丸』テレビアニメ放送。2015年『かむろば村へ』を原 作にした劇場用映画『ジヌよさらば かむろば村へ』を公開。他、代表 作に「Sink」、「I【アイ】」など。仙台市在住。

## 小野和子 Ono Kazuko

民話採訪者



1934年岐阜県高山市に生まれる。東京女子大学 日本文学科卒業。1970年から、宮城県を中心に 民話採訪をはじめる。傍ら、絵本、児童書の翻訳な ども執筆。1975年みやぎ民話の会を設立。現在

は顧問。民話に関する編著書に『長者原老媼夜話』(評論社)『みちの く民話まんだら』(北燈社) 『遠野郷宮守村の昔ばなし』(遠野市)など。 東北記録映画三部作(酒井耕・濱口竜介監督)の『うたうひと』で聞き 手をつとめる。

## 窪田研二 Kubota Kenji

インディペンデント・キュレーター



水戸芸術館現代美術センター学芸員を経て、 2008年KENJI KUBOTA ART OFFICE、2010年 SNOW Contemporary設立。「マネートーク」(広島 市現代美術館、2007-2008年)、「六本木クロッシン

グ2010 — 芸術は可能か?」(森美術館、2010年)、「Don't Follow the Wind」(福島の帰還困難区域内、2015年-)他、国内外の展覧会キュ レーションを多数手がけるとともに、政治、経済といった社会システ ムにおいてアートが機能しうる可能性を様々な文化的フォーマット を用いて試みている。

# 小森はるか+瀬尾夏美 Komori Haruka + Seo Natsumi

アーティスト



映像作家の小森と画家で作家の瀬尾によるアート ユニット。2011年より協同制作を開始。翌年、岩 手県陸前高田市に拠点を移し、風景と人びとのこ とばの記録をテーマに制作を始める。2015年、

仙台に拠点を移し、土地との協同を通して記録を行う一般社団法人 NOOKを立ち上げる。主な展覧会に「3.11とアーティスト」進行形の 記録』(水戸芸術館)、『Art action UK』(HUSK/ロンドン)、『記録と想起』 (せんだいメディアテーク)、『あたらしい地面/地底のうたを聴く』(ギャ ラリー・ハシモト)等。現在は自主企画の展覧会「波のした、土のうえ」 を全国巡回中。http://komori-seo.main.ip/

#### 志賀理江子 Shiga Lieko

写真家



1980年愛知県生まれ。宮城県在住。ロンドン芸 術大学チェルシーカレッジ・オブ・アート・アンド・デ ザイン卒業。2008年写真集『CANARY』(2007年、 赤々舎)、『Lilly』(2007年、アートビートパブリッシャー

ズ)で第33回木村伊兵衛写真賞を受賞。2009年ICPインフィニティ アワード新人賞、2012年第28回東川賞新人作家賞を受賞。 主な個展に、2003年『明日の朝ジャックが私を見た』(グラフメディア ジーエム、大阪)、2008年「座礁の記録」(フォトギャラリエット、オスロ)、 2012年『螺旋海岸』(せんだいメディアテーク、仙台)。

# 高嶺格 Takamine Tadasu

美術作家、秋田公立美術大学准教授



2016年度國立台北芸術大学客員教授。パフォー マンス、ビデオ、インスタレーションなど多彩な 表現を世界各地で行っている。近年の主な個展 に、イギリスを含む4つの美術館を巡回した回顧展

『とおくてよくみえない』(2011年)、震災以降の状況をダイレクトに 扱った『高嶺格のクールジャパン』(水戸芸術館、2012年)、視覚障碍者 に案内されながら巡る『でさぐる』(秋田県立美術館、2014年)など。

# 畠山直哉 Hatakeyama Naoya

军真家



1958年岩手県陸前高田市生まれ。 筑波大学芸術 専門学群にて大辻清司や山口勝弘に薫陶を受け る。1984年同大学大学院芸術研究科修士課程修 了。以降東京を拠点に活動を行い、自然・都市と

写真のかかわり合いに主眼をおいた、一連の作品を制作。2001年 ベネチア・ビエンナーレ国際美術展日本館にて展示、2011年東京 都写真美術館で個展「畠山直哉 ナチュラル・ストーリーズ」(平成23 年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞)を開催するなど、国内外の数々の 個展・グループ展に参加。2012年には、ベネチア・ビエンナーレ国 際建築展の日本館に参加し、国別参加部門金獅子賞を受賞。

2011年の「3.11」以降は、故郷の風景を扱った作品の発表や、震災 関連の発言を積極的に行っている。

# 山内明美 Yamauchi Akemi

社会学者、大正大学准教授



宮城県南三陸町生まれ。専攻は歴史社会学、東 北研究。とりわけ、近代日本における東北地方 の役割とポジションについて社会学、歴史学、 民俗学双方の観点をとり入れながら"The Rice Nationalism"の研究に取り組んできた。朝鮮半

島、台湾など旧植民地地域もフィールドにしている。近年は、宮城県 南三陸町での生存基盤調査もはじめている。著書「こども東北学」 (イースト・プレス)、共著『東京/東北論』(明石書店)、『ひとびとの精神 史」(岩波書店)など。

#### 相馬千秋 Soma Chiaki

アートプロデューサー、NPO法人芸術公社代表理事、

#### 立教大学特任准教授



これまで、国際舞台芸術祭フェスティバル/トー キョー初代プログラム·ディレクター(F/T09春~F/ T13)、横浜の舞台芸術創造拠点「急な坂スタジ オ | 初代ディレクター(2006-10年)、文化庁文化審

議会文化政策部会委員(2012-15年)等を歴任。国内外で多数のブ ロジェクトのプロデュースやキュレーションを行うほか、アジア各地 で審査員、理事、講師等を多数務める。2015年フランス共和国芸 術文化勲章シュヴァリエ受章。

#### 「スタッフ

# 清水翼 Shimizu Tsubasa

劇団維新派 制作

1981年宮城県塩竈市生まれ。劇 団維新派の制作。京都橘大学文化 政策学研究科博士前期課程修了。 2007 年から維新派に所属し、以降、 フェスティバル/トーキョーや瀬戸内 国際芸術祭に参加。離島や山間の町 など、世界のさまざまな場所で現地 滞在型の野外公演を製作してきた。 2015年のみちのくアート巡礼では 受講生として参加。国道45号線を 33年間かけて巡る舞台芸術のプロ ジェクトを提案。 一般社団法人 Arts Ground Tohoku 理事。

# 庄野祐輔 Shono Yusuke

Webデザイナー

ザイナー。 ブランドのアートディレク ションや、サイトのデザイン制作など の業務を行う一方、2005年より「映 像作家100人』(BNN新社)を年一回 ペースで発行。タイポグラフィ、ポス ター、ロゴ、メディアアートなどさまざ まなクリエイティブに関する情報を発 信。パルコで開催された『手塚治虫 の遺伝子 闇の中の光展』など展覧会 のディレクション、またインターネット の文化を追いかけたオンラインマガ ジンMASSAGE (http://themassage. jp/) の発行・運営も手がける。 多摩美 術大学诰形学科非常勤講師。

#### 高橋創一 Takahashi Soichi 編集者/ライター

1986年、宮城県気仙沼市生まれ。 2004年より仙台市在住。仙台短篇 映画祭実行委員、編集プロダクショ ン勤務、とうほくあきんどでざいん 塾アシスタントなどを経て、現在フ エイターを結ぶ活動も展開中。 リーランス。仙台市内の文化施設や NPO、企業関係をはじめ、分野、場 所にとらわれずテキストや印刷物を 中心に活動をしている。ときどき、ラ イブイベントやトークイベント、レク チャー企画などを主催/協力する。 みちのくアート巡礼キャンプ2015

# 一般社団法人 NOOK

2015年、仙台を拠点に発足。土地と 協同しながらドキュメンテーションを 実践する組織。東北を中心とした協 同者とともに、映像・写真・テキスト・ イラスト・ワークショップ・イベントな ど、さまざまなメディアを用いた複合 的な記録活動を行う。主な協同者に みやぎ民話の会、三陸国際芸術祭 アジア・カルチャー・センターなど。 http://nook.or.jp/

# 藤井さゆり Fujii Sayuri

アートコーディネーター、制作

1985年生まれ。日本大学大学院理 工学研究科博士前期課程建築学修 了。2011年よりフェスティバル/トー 1976年、兵庫県生まれ。編集者、デ キョーにて制作スタッフとして勤務。 都市空間で展開するパフォーマンス や演劇プロジェクトの企画・制作を担 当。2014年からはフリーランスとし てアートプロジェクトのコーディネー ト、舞台制作を行うほか、アーティス トたちと街なかを舞台にジャンルに 捉われない様々なプロジェクトを企 画・展開している。

#### 松井健太郎 Matsui Kentaro

エディトリアルデザイナー

1980年福島生まれ。仙台育ち。エ ディトリアルデザイナー。大学にて 建築を専攻した後、秋山伸主宰のグ ラフィックデザイン事務所schtücco を経て仙台·卸町のシェアオフィス "TRUNK" アシスタント・マネジャー となる。現在はフリーランスのデザ イナーとして活動。建築・プロダクト・ グラフィックなど分野にとらわれない 'ものづくり'を中心に、地域とクリ

## 磺崎未菜 Isozaki Mina



1992年生まれ。昭和63年に街びらきされた初期 の多摩ニュータウンの、山を囲った円形の団地で 幼い頃を過ごす。姉がふたり。東京芸大先端芸術 表現専攻修士1年。最近の興味のひとつは、目に

見えない、名前のない感覚や関係の表出について。"じかの分離"と呼んでいる、二つの関係の、イメージが変化するわけではないが、たとえば温度や速度のような、地面の下の感覚のみが剥離したような現象のことで、なにか親密さのようなものを伴っているのではないかと考えている。東北へは東日本大震災後はじめて訪れました。それ以前の暮らしや風景を、わたしは見ることがありませんでした。この滞在を通して、ひょっとした拍子になにかの端と端がふいに触れて、その人やその生活を、知ることができるかもしれないと思っています。そしてそれは、わたしにとっても、大切なものであるのではないか、という予感を持っています。

# 井上亜美 Inoue Ami



1991年生まれ、宮城県丸森町で育つ。東京藝 術大学大学院映像研究科修士課程修了。在学中 に狩猟をはじめる。猟師として生活する傍ら、狩 猟の現場でつぎつぎに起こる出来事をエスノグ

ラフィックな視点で見つめ、自身が出演・演出する手法で映像作品 を制作している。作品に、都会で暮らす猟師の奇妙な生活を描いた 「猟師の生活」(2016年)、震災後に猟をやめた祖父を追った『じい ちゃんとわたしの共通言語』(2016年)などがある。2016年4月より 第5期HAPSスタジオ使用者として京都市在住。

本プログラムでは、フィールドワークを中心に震災以降の東北の狩猟についてリサーチをおこない、参加者と問題を共有することで思いがけない発見があることを期待している。

http://amiinoue.com

## 岩崎孝正 Iwasaki Takamasa



1985年福島県相馬市磯部生まれ。映像作家。自然災害と原発事故の諸問題を、映像(映画)というメディアをあつかいながら思考し、発信する。また、地域(地方)と人間がどのように関わるのかを

テーマに映像を随時発表予定。MEC Award2015で『福島の光景+a』(2014年)が佳作賞受賞。山形国際ドキュメンタリー映画祭2015 Cinema With Us、ボーランドEEC、ニッボンコネクション2016で『自然と兆侯/4つの詩から』を展示・上映。現在、長編映画の企画のリサーチ中。今後、活動していくために縦横のつながりが必要と感じたため、みちのくアート巡礼キャンブ2016に参加。

http://natureanditsmanifestations.co/

# 尾花藍子 Obana Aiko



美大絵画学科卒業後、身体を使った行為表現を路 上で始める。美術・プロジェクト作品発表を経て、 近年はパフォーミングアーツディレクターとの出会 いから、振付家・演出家として活動。人間の根源は

「境界」があることなのではないかと考え、「身体」という境界を入り口にして、自己と他者、その関わりについて舞台作品を創作。本プログラムでは、母が福島出身、父が東京出身の自分が、活動拠点である東京を離れて、現在の東北に触れることで立ち現れるものを具現化するため、人や場との対話を通して表現方法から探りたいと考えている。ダンスカンパニー〈ときかたち〉主宰。シェアハウス&スタジオ〈LAB83〉経営。若手演出家コンクール2014/ミネート、横浜ダンスコレクション2016コンペティション1ファイナリスト。

http://apiece7.blogspot.com

#### 河野輝美 Kono Terumi



1986年神奈川県生まれ。アーティスト。東京造形 大学美術学科卒業。体験を元に、映像やテキスト などを組み合わせたインスタレーション作品を展 開している。旅行先でチェーン店を見つけた時、

見知った場所に抱く安心感と、旅先でもまたコレかとうんざりする 気持ち。そのような二つの相反する感情の中間地点に興味がある。 展示として、髪の毛への極端な感情の変化をモチーフの一つにした [The Monument of TRIAL AND ERROR] (2015年) など。

考えないようにしていたことが徐々に無意識になるように、東北地 方への記憶や反応も時間の経過とともに変化している。それに驚 き、記憶の形の変化について考えたいと思った。様々な形のリサー チを通して、作品の起点とする方法を得たい。

http://trmkn.tumblr.com

## 佐竹真紀子 Satake Makiko



1991年、宮城県生まれ。美術家。武蔵野美術大 学大学院造形研究科美術専攻修了。震災以後の 日常に向けたリアクションとしての表現活動を思 考している。2015年には自作のオブジェ「偽バス

停/深沼』を、震災後路線バスの復旧のめどが立たない仙台市若林 区荒浜に無許可で設置。現在は宮城に在住し、荒浜で開催されてい る「お茶っこのみ」の臨時アルバイトをしながら、偽バス停の観察を 継続している。主な作品に、被災地の風景を個人の視点で再構成し た「あの町の行方」、ゲリラ行為を記録した「この町から問いかけて」 などがある。

今回のプログラムは、東北に対する認識のちがいを捉え直し、表現 の可能性を探る機会と考えて参加。

#### 佐藤駿 Sato Shun



1990年生、愛知県出身。横浜国立大学大学院都市イノベーション学府 Y-GSC在籍中。芸術公社インターン。大学在学中より自主映画の監督・撮影・出演などを始める。撮影を担当した際元博樹監督

「Sugar Baby」(2010年)が、水戸短編映像祭審査員奨励賞受賞、国内外の映画祭にて上映。現在は、演劇の出演や創作を行っている。東京湾に浮かぶパーキングエリア「海ほたる」をリサーチし、それを物語化した「サービスエリア」(@イズモギャラリー、2016年7月30-31日)が近作。本プログラムでは、参加者を撮影したりインタビューしたりすることから始め、後半までにリサーチするフィールドを決めたいと思っている。パフォーマンス創作団体として「犬など」を主宰。

http://inunado.wix.com/inunado

## 中村大地 Nakamura Daichi



1991年、東京都足立区生まれ、府中市に育つ。現 在は宮城県仙台市に在住し、自身が主宰する屋根 裏ハイツという劇団で演出を務める。その演出作 品は、起承転結のある大きな虚構の物語世界を描

くことよりも、その場その瞬間に起こる行為、現象そのものにフォーカスが向けられている。現在は、近作「再開」で民話における伝承行為をテーマに作品を創作したことを契機に、演劇の技術が記録する、受け継ぐという行為にどのように寄与できるのかということに関心を持ち、創作を展開している。本プログラムでは、東北の町々を旅していく中で、今後30年、50年というスパンで何を残すことができるのか、何が残っていくのかという個人的な関心に対して、舞台表現の技術が一体何を為せるのかを思考する時間を過ごしたい。2015年よりARCT理事、屋根裏ハイツHP:http://yaneuraheights.wix.com/home

#### 西岡航 Nishioka Wataru



1993年、東京都福生市生まれ。奈良育ち。 立教大学大学院現代心理学研究科映像身体学専 攻修士1年在籍。大学院では、主にアンリ・ベルク ソンと写真家牛鵬茂雄を手がかりに、写真機とい

う機械知覚、眼という人間知覚のそれぞれの特性と本質を研究。また幼少期から法隆寺や大和文化を生きているものそのままに触れ続け、その影響で「祈り」や「潜在」といった目には見えない〈体温の在る記憶〉を主題として写真作品を制作。撮影ではフィルムを使い、被写体との調和を目指す。学部生時代の卒業制作では、明治期の詩人中勘助の小説「銀の匙」を、写真によって再表現。その結果、人の産みだす言葉のなかには写真の種(あるいは芽)のような存在がある、と感じるようになる。3・11後でも変わらない何かを東北の中から見出すため、本プログラムに参加。

## 野口竜平 Noguchi Tappei



1992年生まれ。アーティスト・バンケキ侍の頭領・ モーメント小平メンバー。武蔵野美術大学油絵学 科版画専攻卒。"距離と時間に対する人間の憧れ" "マレビト・ハレ・芸術の同時空間性"をテーマに

掲げ、「ニューヨーク方面へヒッチハイク」「タイヤを一ヶ月間引っ張 りつづける」「東京都から香川県まで改造リアカーを引っ張ってある く(お金を持たずに出発☆) 2016 春」などポップな作品を数多く発表す る。超感覚パフォーマンス集団【バンケキ侍】の頭領、よそのもアート会【モーメント小平】のメンバーもつとめる。

近年は、パフォーマンス作品やプロジェクト作品の発表・記録方法に 関して問題意識をもっており、日本型地方芸術祭の新たな評価軸の 提案をめざし活動中。一番おおきい夢は自転車で世界を3周するこ と(29歳で出発予定)。http://mukadematuri.jimdo.com

## 水沼大地 Mizunuma Daichi



1995年生まれ。福島県天栄村出身。立教大学現 代心理学部映像身体学科3年。大学1年の時、高 山明氏の演劇の授業を受講。それまでのイメージ と全く違う"演劇"に出会い、その意味の分からな

さから興味を持ち、現在は演劇プロデュースを学んでいる。学外で は芸術公社のインターンとして活動中。演劇が社会に応答して、社 会にどれほど有益なことができるのか、その可能性を半分信じて半 分疑いながら、勉学やその他の活動に励む。

震災後も3年間福島で高校生活を送ったが、どこか他人事のような 感覚があり、今後故郷である福島とどう向き合っていくのか模索中。 また、「震災を忘れない」という謳い文句に違和感を持ち、一生震災 を忘れちゃいけないのか、忘れることが癒しになるのではないかと 反抗心を燃やす。みちのくアート巡礼キャンプでは、将来のビジョン も含めて、故郷と向き合う機会にしたい。

# 合宿ワークショップ

Workshop: 3-7 August, 2016

Day

8月3日(水)

宮城県塩竈市



塩竈市杉村惇美術館

# 揺さぶり、耕す時間へ





みちのくアート巡礼キャンプ 2016、前半の5日間は合宿ワークショップ として、宮城県塩竈市を皮切りに、美里町、南三陸町、岩手県陸前高田 市へと北上を続けながら、講師陣によるレクチャーが行われていきます。初日と2日目のワークショップ会場は、宮城県塩竈市の「塩竈市杉 村惇美術館」。市有形文化財に指定されている、瀟洒な美術館です。

初日の冒頭はイントロダクションとして、参加者、スタッフの自己紹介か らスタート。主催の芸術公社代表理事・相馬千秋からは「最終プレゼン テーションがみちのくアート巡礼キャンプの着地点ではあるけれども、 本番はその後、どのようなことをやっていくかに問われている。この一 カ月は自分を揺さぶり、耕す時間にしてほしい」との言葉がありました。 ついで、さまざまなメディア/ジャンルの参加者11名が、これまでどの ようなことをやってきたか、そしてどのような問題意識を抱えてこの ワークショップに参加したのかを語りました。さらにそれを受けて、初日 の講師である民俗学者、学習院大学教授、福島県立博物館長の赤坂 憲雄氏は、「食と性 | へと話を接続。「食べる | ことの不思議さ、「食べ る」ということが人間の核心であると、話題を展開させていきました。 休憩を挟んで行われたレクチャーでは、「忘れる」「死者の声」「境界」 「まれびと」「故郷」「アイデンティティ」など、参加者から出てきたキー ワードを軸に、赤坂氏との対話形式でじっくりと話を深めていきまし た。また、各レクチャーの様子はNOOKにより、映像で記録され、参加 者が後日活用できるようアーカイブされていきました。

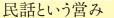
終了後の懇親会では赤坂氏を囲みながら、いよいよはじまったこのワークショップについて、参加者同士が熱のこもった話を交していました。



8月4日(木)

宮城県塩竈市

塩竈市杉村惇美術館





初日に引き続き、「塩竈市杉村惇美術館」を会場にしての合宿ワークショップ2日目。民話採訪者・小野和子氏と、漫画家・いがらしみきお氏、2人の講師によるレクチャーをメインに、語ること/聞くこと、言葉にならないもの/言葉にすることといった、表現の根源に関わる多様な対話が展開されました。

午前10時からの小野氏のレクチャーでは、45年ほど続けられてきた民 話採訪に関する話を聞く中で、これまでに出会った決定的な何人かの語 り手たちと、彼らが実際に語ってくれた民話が紹介されました。民話とは、「話す人が亡くなると、話もあの世に行ってしまう」けれど、「残せるものを持たない人たちにとってのよすが」。さらに、「なにげなく話している民話は人々の思いの結集」といった言葉が聞かれました。

次に、酒井耕・濱口竜介監督による東北記録映画三部作の第三部『うたうひと』の中から、佐藤玲子、佐々木健、伊藤正子、3人の語り手との対話部分を上映。その後のワークショップ参加者との質疑応答では、「民話を文字にするときに気をつけていることは何か」「語り手との関係をつくるときに気をつけていること」などの質問から、本来能動的である、「語り」が生まれる「聞く」行為の本質へと迫っていきました。

質疑応答の終盤、個人の人生の中で起こる辛いことや戦争、東日本大 震災のようなカタストロフィについて、「忘れるのではなく、物語にす ることで「越える」」という話が出ました。民話という営みに根ざしてい る、事実を越えるもうひとつの世界をつくるということ。その源に触れ ることができた、貴重なひとときとなりました。

レクチャーの際には、 毎回 NOOK の瀬尾夏美によって 板書が行われた



# 東北・アート・漫画

午後から夕方にかけて行われたいがらし氏のレクチャーは、表現者としての出自が「なぜ自分はここ(=東北、宮城県加美町中新田)に生まれ、ここで育つのか」という疑問に誰も答えてくれなかったルサンチマンにあるとの話からスタート。

漫画作品をスクリーンに投射しながらこれまでの半生を交え解説し、自分にとって東北というものは「エディブス・コンプレックス、親父に対する反発のようなもの」「東北には身も蓋もないリアリズムがある。リアルにしか生きられない」と表現。代表作『ぼのぼの』はリアリズムでしかない「東北」からリアルを取り除いた牧歌的なものとして描いた、という話もありました。

そして、ファンタジーであるけれどもリアルなものを描こうとした東北





三部作(『かむろば村へ』『『アイ』』『誰でもないところからの眺め』)について触れながら、「アートというものは、言葉から遠く離れたところで成立するもの。言葉によってこの世界はつくられている」「アートをすることによって神様が見えるようになってくる」と発言。この「神様」という発言を受けて、質疑応答では「神様を別の言葉で言うと『法則』。私にとっての神様は信仰の対象ではなく、宗教でいうところの神様ではない。そこにあるだけのもの」との言葉も聞かれました。

いがらし氏にとって、アートとは「怖いもの」。「エンターテイメントの対局であって、言葉から離れている。言葉との距離感を考えている時点でアートではない」。ユーモアのある語りによって、終始笑いが絶えない中、描くこと=表現することの核心が垣間見えた瞬間でした。また、参加者全員に4コマ漫画用の原稿用紙が配られ、これに漫画を描いてみるようにと話す場面もありました。

レクチャー終了後には、4日目に陸前高田でレクチャーを行う小森 はるか+瀬尾夏美による映像作品『波のした、土のうえ』を鑑賞しま した。

# Day O

# 8月5日(金)

宮城県塩竈市→美里町→ 南三陸町



スタジオパーラー

# 「写真の中の世界」





3日目の朝はバスに乗り込み、写真家・志賀理江子氏のアトリエがある 美里町を目指しました。窓の外は快晴。うだるような暑さの中、到着し た志賀氏のアトリエ「スタジオパーラー」は名前のとおり、かつてバチ ンコ店として営業していた店舗をまるごと改装したものです。建物の 内部を巡りながら、アトリエを構えた経緯についての解説をしていただ きました。

レクチャーは、自分が1980年代日本の新興住宅地で生まれ育ったことによって抱えた違和感、それを解消するためにスポーツや踊りなどで身体をひたすら動かしていたという子ども時代に関する話から始まりました。そして写真との出会いについて、「最初のカメラは、撮影が簡単な『写ルンです』。写真にはすごく暴力的な部分と、対象に触らずしてイメージを手に入れられるというスピリチュアルな部分がある。暴力と愛、相反するものが同時にある。思い通りにならない思春期に、そういう『写真』に出会ったんです」と語りました。

続けて、「写真の中の世界とつながるためにどうしたらいいのかと悩

み、試行錯誤の末、撮影したいと思った場所に住むことが唯一できる 方法だと気づいた。2006年にせんだいメディアテークの滞在制作で 初めて東北に来て、生まれ育った場所と全然違う気候や土地の雰囲気 に驚いた」との話から、話題は次第に宮城県名取市北釜地区で制作さ れた『螺旋海岸』へ。宮城県名取市の北釜というコミュニティと関わり、 関係が築かれたことで、そこに暮らすおじいさんやおばあさんが自身 の半生を語ってくれ、北釜と自分自身がクロスする地点がどんどん深く なっていき、行動で答えないといけないと思い……。

北釜住民の方たちとの共同作品だと思っている、と語る『螺旋海岸』創作のあらましと、続けて語られた震災時に経験した強烈な事実。スタジオの空間に志賀氏の言葉が響き、聞き入る全員の身体の中でそれらが静かに反響しているようでした。

この現代社会では、「アーティスト自身がインディベンデントなメディア になることが重要」との言葉でレクチャーは締めくくられ、その後の質 疑応答では、「写真が機械から生まれることを、どのように引き受けて いるのか」「定住する場所を持ったことで制作スタイルが変化したこと に抵抗感はあったか」「撮影するときに恐怖は感じるのか」など、熱気を帯びた質問に対して、強度のある応答が聞かれました。

# 南三陸/三陸世界にて



グリーンツーリズム体験 〈校舎の宿〉さんさん館



志賀氏おすすめの食堂でおいしいご飯を食べたあとは、社会学者、大正大学准教授の山内明美氏と合流。東北地方の米をめぐる言説空間の研究をしている山内氏から、バスの車窓の外に広がる一面のまぶしい緑の田んぼ、この風景はどうしてこのように成立しているのか、解説を受けながらバスは南三陸町へと向かいます。

南三陸に到着後、実際にこの場所に到達した津波の高さがどれくらいだったのか知ってほしいと、廃校になった戸倉中学校まで山内氏に案

内していただきました。また、その付近の水戸辺集落では鹿躍りの石碑についての解説も。さらには、その場に偶然居合わせた地元住民の方のご好意で、震災時のお話を聞かせていただきました。

三陸沿岸の空気を感じたあとは、本日の宿「グリーンツーリズム体験 〈校舎の宿〉さんさん館」へと向かいます。廃校となった小学校の木造校舎をリノベーションした、レトロな雰囲気の漂う宿泊施設です。

タ食後に行われた山内氏のレクチャーでは、歴史社会学の観点から文化ナショナリズム、とりわけライス・ナショナリズムについてお話いただきました。農村風景の近代化やインドや東南アジアでの田園と日本の田園の違いなどの話題から、「他者から名付けられる場所としての《東北》」へと接続し、「鹿躍り」「草木国土悉皆成仏」「三陸世界」といったキーワードや石牟礼道子『苦海浄土』、不知火の漁師・緒方正人の言葉をつなげていきながら、近代的な論理からかけ離れた世界=三陸世界を語ることの難しさ、近代的な価値観ではとらえられない余白をいかにして理解していくかという問題提起がなされました。

三陸の元小学校の教室というシチュエーションで、三陸世界を語ること の難しさを突きつけられた参加者たちは、これまでのレクチャーで受け 取ったことや自身の出自などと絡めながら、各々の問いを発していました。

# リアス式海岸を北上

4日目の朝は、前日に引き続き山内明美氏に南三陸町内の、アニミズムが色濃く残っているスポットをご案内いただきました。最初に説明いただいたのは「巨石」。子宮を意味する巨大な岩であり、その中央に入る裂け目をくぐることで生まれ変わることができる「胎内くぐり」を行う場所です。参加者、スタッフも実際にその裂け目をくぐり抜けて、「生まれ変わり」を体験。このような場所は、もともと山伏修行、修験道にまつわる土地だったということです。

また、歌津払川地区の天然記念物・千年桂が神様の樹であること、その 付近の集落は側を流れる小川が氾濫しても耐えられるように高低差が デザインされているのではないかという考察が聞かれました。

山内氏と別れた後は、引き続き国道45号線を北上し、気仙沼市のリアス・アーク美術館にて、「東日本大震災の記録と津波の災害史」などの展示を鑑賞。復興商店街周辺にて昼食を楽しみ、いよいよ合宿ワークショップ最後の場所、陸前高田市へ。車窓から、かさ上げ工事が行われている市街地の風景を見つめながら、「箱根山テラス」に到着しました。ここは震災後に、広田湾を一望できる高台に建てられた宿泊・滞在施設です。

# Day A

# 8月6日(土)

宮城県南三陸町→

気仙沼市→岩手県陸前高田市



箱根山テラス

# 土地の変化に携わること



ひと休みした後、写真家・畠山直哉氏も合流し、小森はるか氏と瀬尾夏美氏によるレクチャーがスタートしました。陸前高田市で、地元の人と作品をつくるようになった理由を、「2011年4月に見た風景とその翌月の風景があまりに違った。5月にはもう、瓦礫のあいだから草が生え始めて、地元の人は『春が来た』と、少し楽しそうに話していたんです。その一カ月間のスピードが早過ぎると思った。それで、この土地に暮らせば変化に付き合えると思いました」という実感から、震災9カ月後に京都で行われた報告会でうまく話せなかった経験を経て、「この街を『ほんとにほんとにいい街だった』と言う人がいる。その『いい街』を知りたい、見てみたい。もう全部ないと言うけれど、目の前には風景がある。そこで話している言葉もある、それを言葉にしたいと思った」と瀬尾氏は語りました。

また、関わり方の立場に関する話題もありました。地元の人からは、「地元の人間になっちゃいけない」「距離が取れないと発表できなくなる」と言われたそうです。「私たちはずっと旅人でないといけない立場。外の人と地元の人の際に立ちながら、その場所を見て、聞いて、かたちに落としていくことをしていきたい。それは作品を制作するときも同じ。縁もゆかりもない東北に来て、ここがどういう場所かもわからない、たまたま来ただけかもしれない人間だけれど、私は陸前高田市に対して恋をしているような感覚があるんです。この街とどう付き合っていくかを考え、自分の生活をどう組み立てるかが大事だと思う」(瀬尾氏)と、生活者/表現者、内部/外部の輪郭を意識しながら、立場を往復する、その往還の中で制作していく覚悟が聞かれました。

次に、2日目の夜に上映された『波のした、土のうえ』にも登場している 阿部裕美氏によって、瀬尾氏のテキスト『二重のまち』の朗読が行われ ました。また、瀬尾氏、小森氏、阿部氏の案内のもと、陸前高田市の市街地へ赴き、『二重のまち』で描かれている風景のモデルとなった場所に実際に立ち寄り、その話に耳をすませながら、かさ上げ工事の行われている震災6年目の陸前高田市を見つめました。さらに畠山氏には陸前高田市気仙町のご自宅跡地まで案内いただき、震災前、震災後の気仙町についての話を聞き、貴重な時間を共有しました。







# 8月7日(日)

岩手県陸前高田市

箱根山テラス

# 発表と講評、そしてリサーチ/フィールドワークへ

5日間の合宿ワークショップ最終日。午前中は各自、これまでに見聞き し、体験したことを振り返りながら、自身の問題意識と接続させ、午後 の発表に向けて準備をする時間となりました。

お昼過ぎからは、今後のフィールドワークの方向性を参加者一人一人が発表。写真家・畠山直哉氏も場に加わり、その発表に応答します。 自身の出自や表現者として立ち上がった経緯を踏まえ、この濃厚な5日間をクロスさせつつ、しかし咀嚼できないままの迷いを覗かせながら言葉を紡ぐ参加者も少なくありません。発表を受け、ときに厳しくも聞こえるフィードバックから、それでも自分の問題意識を言葉にしようと する姿が見られました。

全員が一度発表した後、屋外のテラスに出て、畠山氏と相馬が交わす 言葉をきっかけに、地域アートの抱える課題や自分の立場を固定しないで話を聞くことの重要性、美術史やアートとされているものを学ぶことの大切さ、リアクションとしてではない芸術が持つ普遍性など、いくつもの話題を展開しながら、先程の発表を反芻しつつ、参加者との応答が引き続き行われました。畠山氏からは、「あるフレームに合わせることで、使ったことのないところが発達するかもしれない。普段やり慣れないことをやってみるというのも、この一カ月のワークショップで挑戦してみていいのでは」という提案も。

そして、「中間発表では、その時点までのベストを尽くしたプレゼンテーションをしてほしい」との相馬の言葉で合宿ワークショップは終了しました。塩竈市から陸前高田市まで北上を続けながら、東北の夏の匂いをたっぷりと吸い込み、多くの学びを得た5日間は、こうして幕を下ろしました。帰り道、一同を乗せたバスは、陸前高田市の夏祭り、「うごく七夕」と「けんか七夕」が行われる中を通っていきました。参加者たちは中間ワークショップに向けて、それぞれの場所でリサーチ、フィールドワークを展開していきます。





# 中間ワークショップ

Workshop: 15-16 August, 2016

## 8月15日(月)福島県福島市

# 中間発表で問題意識を言語化

2日間の中間ワークショップは、前半の合宿ワークショップ後、1週間のフィールドワーク、リサーチ期間を経て、現時点で考えているブランを発表し、講評をし合う場です。会場は、ギャラリー・オフグリッドのある県庁南再エネビル。講師にインディペンデント・キュレーターの窪田研二氏と美術作家、秋田公立美術大学准教授の高嶺格氏を迎えて行われました。

相馬からは、「この場でプランの完成形を発表する必要はなく、正直にいまの自分の状態を話してほしい。また、講師に対しては参加者のバックグラウンドを共有しないで行います」とのアナウンスがありました。

1人目に発表したのは、岩崎孝正さん。映像作品『かつて があった場所で(仮)』と題したプランでは、原発事故を公害と捉え、四大公害である新潟水俣病(新潟県)、イタイイタイ病(富山県神通川)、四日市ぜんそく(三重県四日市市)、それぞれの場所を訪れて撮影した映像を上映。最終的には5面スクリーンでの映像インスタレーション展示を検討しています。「公害をジャーナリスティックに追求、告発したいわけではない。地域住民と企業によって、公害を元に戻していった過程、地

域が風評被害、汚染からどうやって立ち直ってきたのかに注目したい」と説明しました。これに対し、「アーティスト、作家として何を見せようとしているのか。世の中にあるものをどう可視化していくか考えると、作品に深みができるのでは」(窪田氏)などの講評がありました。

西岡航さんは、8月11日から14日までの4日間に仙台、石巻、女川で撮影してきた写真をまとめた動画を『万歩ノ記』と名付け、プロジェクションしました。テーマは「動く定点観測」。偶然性の打率を上げるフレーミングとして、100歩ごとに





撮影するというルールに決めて、そこから見える ものを撮影しました。講師の相馬からは、「対象 と自分の関係性の切り結び方への時間、負荷が 足りない。撮るプロセスを考える時間を取っても いいのでは」との声が上がりました。

「まだなにもできていない。そもそも使うメディアが決まっていない。ご了承ください」と述べた水沼大地さんは「震災を忘れてはいけない」という言葉への違和感が自身の問題意識の出発点だと説明。そのうえで、震災が自分の一部になっていると思い、「忘れても大丈夫」だと考えるようになったといいます。また、この1週間、自分に向きあい、参考になるモデルを探し、「ドラえもん」(藤子・F・不二雄)に出てくるひみつ道具・アンキパンを思い浮かべたそうです。「震災を自分の中に取り込むことが、食べるという行動につながったんです」(水沼)。

礒﨑未菜さんは、7歳のときに亡くした祖父を弔 う行為が、自分にとって重要なものだったといい ます。それを抽象化し、他人に受け渡すために発 想された装置はプロジェクタから映像を流し、その熱で飴が溶けるというもの。装置の模型を提示しながら説明を続けました。それに加え、労働歌が気になっていること、それを受けて装置で流す映像は八戸から大船渡まで南下し、その過程で子どもの友達をつくり、その子と一緒に土地を歩き、飴を探す過程を作品にしたものにしたいと述べました。講師陣からは、抽象化が足りないのでは、との疑問の声が。

「残るもの/残らないものについて」を念頭に陸前高田、気仙沼、南三陸、仙台、須賀川、福島とリサーチを重ねた尾花藍子さん。その中で一番衝撃を受けたのは、陸前高田から南三陸に移動したときに感じた、「未来と過去が同時代に同時にあること」でした。そこでの違和感を後世の人に残したいと考え、体感を他者と共有できるようなメディアはどのようなものがあるか、アウトプットの形態を限定しないで考え続け、「本をつくる」というアイデアが浮かんだといいます。しかし、応答の中で本のイメージが固まっていないことなどに触れ、講師陣からはもっと粘って向きあって



みてはどうかと指摘されました。

野口竜平さんは、タイヤを引っ張り、それが地域の人にとってどのように見えていたのかを後日調査する行為で構成された『タイヤプロジェクト』を陸前高田市広田町で4日間にわたり実践しました。広田町にたどり着いたのは、ヒッチハイクで移動したことによる偶然。自身の持つテーマは「よそもの」であり、身分を持たない状態で関わることに興味があるといいます。講評では「言語化できない行為に向き合えることは一個の才能。今回は無理やり着地させずに、たまたま出会ったコミュニティから、何か別の出口を見つけられればいいのでは「(相馬)との応答がありました。

---

「不自然さはコミュニティの方言になるか?」を テーマに掲げた河野輝美さんは、ドゥルーズ=ガ タリやミシェル・ド・セルトーらの言葉を引きなが ら、不自然さがあるからこそ想像が喚起されるの ではと問います。それらの考えを辿っていくこと で、家庭の中で行う猫のための儀式について思 案しました。これについては、窪田氏から「アート という異物が地域に入ったときに作用する問題 設定でもあると思った。自分の家族というコミュニティでなにかをしようとしているのは、アートしては非常に弱い。モデルの提示になってしまうのはどうなのか。もっと広げて飛び込んでもいいのでは」との疑問も。

---

中村大地さんは、「演劇は記録、記憶の役に立たない。同時代の共有体験にしか向かっていない」といいます。そのうえで、記憶を共有する場をつくること、補助線(=サブテキスト)が消えていく過程が含まれた長い期間の上演といったフレームやシステムをつくることを考えました。これに対し、相馬からは「演劇は上演だけではなく、戯曲という記憶装置で長い記憶を経る。その時代その時代の劇場で上演されて、何千年のプロセスを経て、いまに至っている作品がある」との断りがありました。

\_\_\_

ヒップホップについてリサーチしたい、というのは佐藤駿さん。その理由について、ラップで地元をレペゼン(代表)する感覚が不思議だったからといいます。今後は仙台市内で行われるサイファーに足を運んでみること、東北出身のラッパーによ



るリリックの内容を調べていくそうです。

---

井上亜美さんは、丸森町筆甫に暮らす祖父と共に 害獣駆除へ出かけた際の映像を上映。合宿ワークショップで赤坂憲雄氏が述べた「食べることの 緊張感」という言葉を聞いて、震災以降の食べる 行為に考えを及ばせようと思い、再び狩りに出か けるそうです。また映像作品においては、自分な りの文法を見つけて作品化したいといいます。 応 答の際、「一番かわいそうなのはイノシシ。 そのイ ノシシの役を人間が演じてもいい。 猟師としての 自分とアーティストとしての自分をもっと分けて考 え、アーティストとして作品をつくることに挑戦し てみては | (高領氏)とのアドバイスがありました。

佐竹真紀子さんは、プランの決断を決めかねていると逡巡しながらも、自分が偽物のバス停をつくることは、震災前の風景のリマインダとして機能するのかという問題意識によるものだと説明。災害危険区域である仙台市若林区荒浜の人から話を聞き、それを表現に結びつけていくことを長いスパンをかけて行っていきたい、といいます。偽のバス停を置いたときの異化効果、それが成功したと思うか、など高嶺氏からの問いに、慎重に言葉を紡ぎながら応えていました。

全員の発表後、講師の窪田氏によって、震災以降 のプロジェクト『Japan Art Donation』『創造的復 興プロジェクト』『Don't Follow The Wind』を何 故行ったか、そしてそれはどのように行われてき たのかが紹介されました。

また、高嶺氏は『ジャパン・シンドローム』シリーズや『高嶺格のクールジャパン』展、プロデュース展『明日の拷問』などの震災後の活動を取り上げ、「日本社会」というフレームで活動することに自分のリアリティがあると述べます。さらに、現在の政治とアートの置かれている状況について、窪田氏も交えての対話が行われました。

## 8月16日(火) 福島県福島市

# グループディスカッションで問いを深める



参加者は講師陣との対話・質疑・応答を重ね、今 後の方向性を見つめていきます。比較・参考になる表現を互いに挙げ、具体的な細部を指摘して イメージを詰める中で、自問を繰り返し、言葉を 尽くす姿が見られました。相馬からは、「最終プレ ゼンに向けて抽象化を行っている途中だけれど、 どこで行われ、誰が来て、その場所とどのような 関係を切り開けるのか、一度考えてみてほしい。 また、発表の際には必ずタイトルをつけてもらう。 タイトルを考えることは中身とは別のフレーム。 自作について、別の視点で考えるきっかけになる」とのアドバイスがありました。参加者の中か らは、これまでとは異なるジャンルの表現に挑戦 しようとする声もいくつかあがっていました。

1時間のグループディスカッションを3セット行った後、参加者から一言ずつ、この2日間を受けて最終プランに向けての方向性が発表されました。こうして中間ワークショップは終了。次にこのメンバーが顔を合わせるのは、いよいよ最終プレゼンテーション/講評です。



# 終プレゼンテーション/講評

Final Presentation / Review: 27-28 August, 2016

この一カ月の締めくくりとなる最終プレゼンテーション/講評の会場は、 合宿ワークショップのスタート地点でもある「塩竈市杉村惇美術館」

講師は赤坂憲雄氏、窪田研二氏、高嶺格氏、畠山直哉氏、相馬千秋の5名。 11名全員にプレゼンテーションと講評、あわせて30分の時間が与えられ、 この一カ月間に向かい合い続けた問題意識を昇華したプランを発表しました。

《休憩》;

# 「プレゼンテーション発表順」

8月27日(土) 8月28日(日) 17:00-21:00 13:00-17:00

- 水沼大地
- /1/// (礒﨑朱菜 2///岩崎孝正
- - 中村大地 3///尾花藍子

〈休憩〉

- 野口竜平 /河野輝美
- /5///佐藤駿 西岡航
- /佐竹真紀子

NO.

水沼大地 記憶宅急便 概要 -

出身であり、内陸で震災を経験上げているが、本当にあなたや私 したことが「言葉にしにくい被災 や他の人たちが必要としている肝 だった」と説明。そのうえで、震災 心の何か、それの整理ができてい 後に聞かれた 「忘れない」という ない印象を受けた。 奥まで踏み込 言葉への違和感を出発に、「忘れんでいる部分と、表面的、サブカル てもいいのでは」という思いを経 的なものがガタついている。言葉 て、「忘れても大丈夫」という言葉 そのものや食べる行為への慎重さ が自分にあっていると気づきましを考えなおす必要があるのでは。 た。そこに、藤子·F·不二雄の漫画 **赤坂**— 「記憶を食べる | というの られない悲しいことを書いてもらこの先があると思う。 い、それをパンに焼き付け食べ、 窪田――7年後のメッセージカー 時間=7年後にその当人へメッ してもよいのでは。 セージカードを送る、という一連 高嶺―― おもしろい企画だと思っ を食べること」が主題です。

講評

水沼さんは福島県岩瀬郡天栄村 畠山――とても大事なことを取り

『ドラえもん』に出てくるひみつ は初めて聞いた。「食べる」は消 道具・アンキパンを接続させて発 化することを前提としている。も 想された「記憶宅急便」は、忘れ う少し食べることに自覚的だと、

人間の細胞がすべて入れ替わる ドの文章は、意図が伝わる言葉に

の流れで構成された企画。「記憶 たが、文章を書いてもらうことの ハードルがある。関係づくりのプ ロセスが必要ではないか。



概要 -

宮城県丸森町の出身で、祖父が とにショックを受けた井上さん。 今回、丸森町での狩猟に同行し、 ルでは区別がつかない。 説明しました。「食べることの自 明性が震災以降失われたと聞き、 線量の低い地域で暮らす人が演
キャラクターの話になってしまう。 じることで生まれる違和感を浮か ンからなる映像作品「イノブタ・ いました。

講評

赤坂―― タイトルの「イノブタ」は 福島第一原発事故後にそれまでイノシシとブタが交配している、 長年続けていた猟師を辞めたこ つまり異質なものが交配している 動物。イノシシと豚は遺伝子レベ 実際にそこで得たイノシシの肉を 畠山――(シーンによってはドキュメン 持参、そのセシウム濃度について
タリー的な手法で撮りたい、物語をつく

るつもりはない、との説明を受けて)映 像は思い描いたことが実現でき それが『食べる』ことを考えるきっない。そのうまくいかなさを強調 かけとなった」と述べ、放射線量的に見せる手法もあるが、そうす が高い地域で暮らす人の生活を、ると放射線量の話ではなく心理や **窪田** --- フィクションにすること び上がらせるための、4つのシーのメリットが気になる。線量の低 い地域の人の違和感をどうやっ イーハトーヴ | について発表を行 てあぶり出すのか、作家の力量が 出るので、その手法ともっと向き あってみては。



NO.

吉 、と言葉で記憶に/をとどめる(レシピ)

Nakamura Daich

中村大地

概要 -

のキーワード、「補助線」「記憶」 ことを題材とし、この世にはもう で絡めて考えているのか。 いきます。さらに、その「人」の「行なのだろうか。 す。「言葉は文字よりも声で受け ころを、再考するといいのでは。 とで最終的にはアーカイブ、またと思った。

講評

ワークショップ期間中に得た3つ 赤坂 ― いまの時代、声の記録 は機械、機材によって簡単にでき 「死んだ人の声を聞く」から着想 る。保存や記録、アーカイブは状 を得た「声と言葉で記憶に/をと 況の中で生まれている。このよう どめる(レシビ)」は、忘れたくない な中で、声と文字を記録とどこま

いない「人」についてリサーチ、 高嶺―― 言葉を集める時点で、ス その人がした「行為」「習慣」につ カスカになっている。それがその いて考え、それを記録、追記して 人をトレースする方法として適切

為」を作品にし、それの感想を受 相馬――記憶を多面体のまま録り け取り、また記録を見ての追記、ためて、それをシステム、レシピと 弁明を受け、それらすべてのまと して発明しようとしており、戯曲を めた寄せ集めの名前をつけて保 つくる方法論とは違う。プロセス 存。これを時間をおいて繰り返し としてまだ未整理。プロセスの保 ていくという、演劇の上演を含んを、分類を行うのは、実際にやる だ5つの段階から成る方法論でとなったら大変。いま未整理など

取ったほうが豊かではないか」と **窪田**――単に演劇作品をつくるこ 提起し、この方法論を繰り返すことをやろうとしているのではない



# 発進 Yosomono collective

野口竜平 Noguchi Tappei 概要 -

陸前高田市広田町でフィール ドワークを行い、「Yosomono まで理解しやすかった。これから collective」と銘打った、時代とが楽しみ。「Yosomono」という言 社会に応答しあらたな芸術を葉で、地方に焦点をあてている。 実践する漂泊活動集団を組織。 自分が生まれ育ったエリアは気恥 「地域社会」「芸術」「おまつり」 ずかしい、変わったことを好まな が重なりあうポイントに向かいたい人が多い。そこで何が起きるか いと語ります。そこには地方芸術 祭、地域アートの増加と同時代 芸術の乖離といった問題意識が ありました。さらに、2017年3月 に広田町と山田町船越で行う予 定の、滞在制作・参加型プロジェク ト・個展が一体となった「発進!み ちのく・半島プロジェクト」につい ての説明が行われました。

#### 講評

畠山──プレゼンが最初から最後 期待したい。 赤坂──地域に溶け込むことを

テーマにしないのはとてもいいな と思う。西田正規『人類史のなか の定住革命』では、遊動社会から 定住社会への変化は、逃げられる 社会から逃げられない社会への 変化だという。でも逃げていいと 言いたい。また、細江英公と土方 巽の『鎌鼬』は、異形のよそ者に よって生まれた一瞬の祭り。それ を見た人は、いまでも大事な記憶 として語り継いでいる。



NO.

企画者本人が撮影者となり、岩手 た静的なものと、「自分自身がそ の風景のなかに入る(被写体となり 同行者が撮影する)」または「他者の けて他者と交わり、言葉を受け取る= 参照させることになってしまう。 他者になる)|動的なもの、2冊でひ 赤坂── 「畦道を渡る」、そのイ とつとなる写真集を編むプラン。 添えることを考えています。このプ 二重写しの世界、誰かの記憶とす ある。 化させていくかが問いとしてあっ渡ってしまうことになる。 た、と語ります。

概要 -

講評

畠山── 写真は手軽なグラフィッ 県遠野市の畦道を26地点撮影し ク生産の道具だから、参画する人 間は多く、ポエトリーな写真も多く 撮られている。だが、ポエム、アー トな雰囲気のある写真は、近代写 異なる風景が入ってくる(時間をか 真家たちの工夫や作法を一気に

メージが湧かない。「畦」はそもそ いずれの写真集にも言葉、文章をも、緊張感のある境界。真っ直ぐ な畦道がノスタルジックに聞こえ ランは、自身がリアリティを感じるるが、そこは血まみれの現場でも

れ違う、そこにいない他者が立ち 畠山――陸前高田では畦道を「く 現れる気配を畦道に感じ取ったころ」という。「くろ」を渡ると隣り とがきっかけでした。風景を固定 の田んぼに行ってしまう。「畦道 的なものではなく、いかに生成変 を渡る と、田んぼから田んぼに



畦道を渡 Nishioka Wataru 西岡航 る

偽路線バスきょうは終点ゆき 佐竹真紀子 Satake Makiko

概要 -

このプロジェクトは、震災前に運 畠山 ── 機械によるアナウンス 行していた路線バスの場所に偽 は、生身の人間の声よりも、情動 バス停を立て、その区間を実際に に訴えるものがある。それを理解 バスを走らせるもの。まずは仙台 しないと、どうかなという気がす 市若林区荒浜地区で実行したいる。プレゼンはかわいくて人を安 と語ります。 荒浜地区は道路の嵩 心させるけど、映像とアナウンス 上げ工事が始まり、現在車が通っに背筋が凍りそうになった。また、 ている道がいつ使えなくなるかわ バスと乗用車は高さが違うので、 かりません。その中を月に1回定 高いところから土地を見るのがフ 期的に運行することを検討してレッシュな体験になると思う。 います。予行運行として実際にそ 赤坂―― 結構怖いものがある。予 の路線に乗用車を走らせ、アナウ 定調和でいかないものを、偽バス ンスの声を乗せた映像を流しなと偽バス停は秘めている。 がら、「降車アナウンスには震災 以前にこの場所にあったお店の 情報を入れています。震災前の暮 階で実現してほしいと思った。 荒 らしに気づき、地続きの感覚を持 浜以外の地域でも走らせたいと てる装置になったらいいと思いま いう声が出てくるのでは。あざと す」と補足。この後は地元や仙台 くならない程度に周辺と関係をつ 情報発信をして、1年後には試運 転まで実施したいと述べました。

講評

相馬── いましかできないプロ ジェクトなので、なるべく早い段

市の人に相談しながら資金調達、くって、やっていく価値がある。

NO.

あつめ、リズムを伴った新しいう更をしても構わないと思った。 たをつくり、滞在最終日にライブ 赤坂―― 言葉が生きている。大相 会場は、その土地の土俵の近くを 巡業は15日もやらない。15日間 指定。これを53カ所で繰り返し、というのは長いのでは。 甚句のあり方をヒントにしたといにかくつくってほしい。 います。

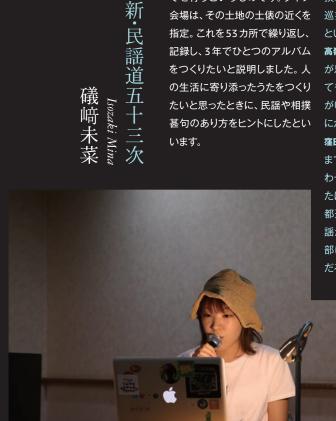
概要 -

講評

うたうこととは、目の前の現実か **畠山** — 話に引きこまれました。 らリズムを伴って逃れることでは 参加型アートの課題は、サスティ ないか。そのような問いから発 ナビリティ。アートはその瞬間の 表した企画は「新・民謡道五十三 お祭りの祝祭性だけではなく、あ 次」と題された、ある土地に15日 る程度続けて心が変化してくプロ 間滞在し、その土地で毎日句会 セスを大事にする。ある程度の期 を行い、そこから選句された句を 間続けるプランにするための変

記録し、3年でひとつのアルバム 高嶺 日本全国というとルート をつくりたいと説明しました。人 が思い浮かばない。全国じゃなく の生活に寄り添ったうたをつくりても、まずは軌跡をつくったほう たいと思ったときに、民謡や相撲がいい。時間をかけすぎずに、と

> 窪田──巡業先が気になる。どこ まで相撲のフォーマットと重ねあ わせる意味があるのか、明確にし たほうがいい。屋外に土俵のない 都道府県もある。東北だと新・民 謡がイメージできるけれど、都市 部においてどんな歌が生まれる だろうか、楽しみだ。



Michinoku Art Pilarims Camp 2016 Report Book

最終プレゼンテーション/講評  $| \rightarrow | \rightarrow \rightarrow | \rightarrow \rightarrow \rightarrow |$ 

# 概要 -

か

つ

が

あった場所

仮仮

Iwasaki Takamasa

岩崎孝正

映像作品『かつて 場所で(仮)」と、作品発表の場と 頼性を強調したのだろうか。映像 して構想された「そうそうアート アーカイブフレームワーク」とい う、2つのプランの発表となった 梨農家の映像を見ると、監督の心 岩崎さん。前者の映像作品につ いて、福島第一原発事故を「公 害 | だと捉える視点から、四大公 害の起こった場所の現在の風景 を撮影。「目的は告発や企業批判 ではありません。四大公害の被害 を受けた町は、風評被害や環境 る。言ってることはわかるが、福島 汚染をいかに克服したのか、それ の現実は体感できない。線量は を知ることが福島の未来を考える うえで必要ではないかと思いま す」と述べ、一次産業に携わる人 や収穫物を取材・撮影した5面か る。それは福島ではなく、国に対 らなる映像インスタレーション作 品について説明しました。後者で は、相馬野馬追いのアーカイブや

#### 講評

があった **畠山**──プレゼンでなぜ映像の信 と信頼は、複雑でめんどくさい議 論が生じるもの。ただ、今回流した 情が伝わってきた。意識してないか もしれないけどニュアンスがある。 赤坂──やろうとしてることが見え ない。このタイトルが隠されている 問いをむき出しにしているのに、 <u>向き合い</u>方を曖昧にさせられてい 数字でしかわからないものだ。 高嶺──映像に対する信用ではな く、国に対しての信用の問題があ する問題。 相馬―― 今日のプレゼンは、プラ ンの話と見せ方の話が混在して NO.



33

言葉のな

# 概要 -語ってもらっている他者との時間 い言葉を聞く「言葉のある対話」 をするというもの。「場所や環境ものには、訳がある。

が人間の身体を変えるのか」とい 相馬――一連のプロセスが十分に う問いからきており、ねらいは、参外部に開かれれていない。これま 加者が他者の「身体」を見つめる でのパフォーミング・アーツの歴史 行為を通して、それぞれ自分の「身 の中で、さまざまな形で出会いを 体 | をじっくり見ることのできる時 組織する作品をつくってきたアー 間をつくること。2日間を踏まえ次 ティストがいるが、それらを参照し のステップがあると考えるが、そではどうか。

/ある対話に出会う旅

# グループ展を検討しているとい いる。どちらも大事なのはわかる います。 が、シンプルに考えていったほう が武器になる。いろんなエクス キューズ、当事者性の強さを一度 切断し、やりかた自体を組み直し てみては。

## 講評

東北で強烈な身体感覚として残っ 畠山 — 行為の構造、仕組みを見 たのは「思い出の場所で、かつて ていると単純、簡単、工夫がない そこに起こったこと、あったことをとも言える。判断は相手を知って 生まれるものだが、このプランで の共有」だという尾花さんは、2日 は気づき、驚きがどこで生じるの 間の身体ワークショップ「言葉のか。この工夫のなさに対して、参 ない/ある対話に出会う旅」を発 加しようと関心を抱くイメージが 表しました。内容は初日に目に見 浮かばない。命令とそれに従うよ える体と場所による「言葉のないうな、あまり柔らかくない雰囲気に 対話 | を行い、2日目に目に見えな なる気がする。 宗教の修行であれ ばもっと工夫されている。長く続く



尾花藍子

Michinoku Art Pilarims Camp 2016 Report Book

# 概要 -

You

Know Where This

東北滞在中、そのほとんどの時間 きに、今回ワークショップに参加 概念がなく、そのために習慣を壊 すことがなかったといいます。発 表したプランでは、全国どこにで 観光地の身振りをすることで、均 一的な街やそれを支えるしくみを あぶり出そうとするもの。実際に 仙台市内のカフェで撮影した映像 を流しながら、説明を行いました。

## 講評

畠山──果たして、プランがここに をチェーン系カフェで過ごしてい着地したかったのか、リアルに感 た河野さん。そのことを顧みたと じられなかった。一種の批評だと 思うが、このプレゼンの中でのあ したのは制作のヒントを求めての なたの立っているところが宣言さ ことであり、旅をしているというれてなかった。大きな力と戦うた めの語彙が変化しており、20世紀 とおなじ喋り方で対抗してもどう なのかという疑問があるので、あ もあるチェーン系力フェであえてなたたちの世代への期待はある。 赤坂──日常が均質かというと、そ

うではない。日常の小さな差異、日 常の風景は微妙に屈折してる。何 故日常に飽きないのかというテー マのほうが面白い。このプランは **亀裂、裂け目をさりげなく生じさせ** ようとしているのではと思った。

窪田──映画『国道20号線』(富田 克也監督)は、駄目な人間を描くこ とで社会、システムを描く作品だっ た。もっとそういう人間をあぶり出 すことで批評性が出るかもしれな い。でもいまの段階では作品以前 という印象を受けた。

相馬――みちのくから弾かれたこ とは敗北だけど、観光客として違 和感を生じさせようとした。観光客 という身振りを突き詰めてやって いけば、何かしらにはなると思う。 身振りを先鋭化、反転させるもの を構造化できれば作品になる。



NO.

概要 -

風景に声を上

/下書きする方法

ラップ現象

感動を、フリースタイルのラップティストがいる。 と接続。このプランでは、サイ **赤坂**──中世の連歌を思い出し ファーを引用が引用を呼ぶ場とた。連歌は座の文芸で、座の全体 して捉え、サイファーに参加してをみんながつくろうとするもの。 いるラッパーに「思い出すとなん 引用が引用を生む場であり、引用 だかさみしい風景 | についてイ は先行する人への敬意である。 ンタビュー。そして、その場所に 時間的な連続性への信頼の上に ラッパーと一緒に行き、そこでい成り立っている場。 ま見えるものについてラップをし **窪田** ── 震災後にChim ↑ Pom てもらいます。そのラップに、インがつくった映像作品『気合い100 タビューした内容を足してさらに 連発』を思い出した。 ラップしてもらい、それを映像に 高嶺―― 見たい気になってきた。 プが重ねられそうなひとつの風景 を探し、その場所でサイファーを 相馬 --- 意識せずにプランの中 開催。現在の風景に過去の風景

講評

合宿ワークショップ中、陸前高田 島山── 陸前高田市にもラップを 市の畠山氏のご自宅跡で経験しやっている人がいる。まちなかの た、身振りと言葉でかつてあっ ラッパーを沿岸部に連れていく た場所を立ち上げていくことののも手だが、沿岸部の人にもアー

撮り、YouTubeにアップ。3人以上 ラッパーへの説明をするときに震 撮影できたら、それら全てのラッ 災のことをいうのか、そこははっ きりさせたほうがいい。

> でよく出来ているところをもっと 練ってほしい。ラップは若者文 化、前を向いているもの。これは 佐藤さんの作品であると同時に 開かれたプラットホームになりえ る。時間、集団の芸術であり、演 劇的な仕掛けだと思う。

Sato Shun





# ワークショップを終えて

真夏の東北でのみちのくアート巡礼キャンプを終えて、 その感想や総括を参加者一人一人が綴りました。 振り返ってみて、得たもの、見えたものは何だったのでしょうか。

こんなにも、なにかに形象されてしまう前の曖昧なプロセスを何重にもじつくり見て、聞いて、対話してもらえる経験はそうありません。東北の怪物たちに何度も圧倒され、揺さぶられ、気が遠のくばかりでしたが、今後、自分がどういった場所に立ち何を考え、どう行動していくのかを深く考えた、とても重要な一カ月間でした。そして、このWSで得た新しい出会いが大切な財産になりました。

[礒﨑未菜]

東北とは私の生まれた場所であり、手垢にまみれた日記のようなものでもあり、開くのにちょっと勇気がいる。今回出会った人たちは私の生い立ちすべてを知らない。それがなんだか自由で、とても心地よかった。私は猟師でもあるが、気づけば猟師が登場しないブランが出来上がっていた。自分にとってのぬるくない体験が、いろんな場所や人の体を伝ってかたちを変えた瞬間だった。

[井上亜美]

初日のレクチャーでみちのくという 迷宮へ案内されました。しかし案内 されたまでは良かった。道の奥(み ちのく)ですから、案内をされて、見 ても、聞いても、歩いても、とうて いゴールにたどり着けません。だっ て、人生の大半をみちのくの活動に ささげている先生方が、まるで道 半ばのように講義をなさるのです から。でもけっきょく、先生たちのお かげで、わたしは新しい構想を生む ことができました。未知の奥へ進ん で行く所存です。 ほんの一部だけど、今の東北を見る・知ることができて本当に良かった。そしてそれをカッコつけて扱うなんてことしなくて良かった。時々迷子になりましたが、面白い人たち・縁に助けられました。ハードな環境に身を置いてもがき続けて、最終日にチラッとヒントが見えた、螺旋階段を一段上ったような手応えを感じています。

[河野輝美]

一カ月、東京に帰らず、東北にどっぶり浸かりながらの合宿ワークショップと個人リサーチの濃厚な日々。自分自身の積み重ねてきたもの以外に新しい開発をしないと、真意と向き合えないような出来事とたくさん出会うように組まれたプログラムでした。自らの価値観を根底から揺さぶられたことで、作家としての在り方を確認する大変貴重な機会でした。皆様、本当にありがとうございました!

[尾花藍子]

東北の地で応答もままならない程 の揺さぶりを感じつつも、「みちの くアート巡礼キャンプ」の場は常に 広く開かれていました。南三陸で体 験した胎内くぐりのように、生まれ 変わるチャンスを毎日もらっている ようなーカ月。ナーバスになってい ないで、心を尽くしていくこと。 いた だいた言葉と共に、これから新しく 始めていきます。

[佐竹真紀子]

ほんとうに贅沢な時間だった。合宿WSでは、講師の方々の魅力にただただ圧倒され、最終発表では、真剣に自分の話に耳を傾けてくださる空気がほんとうに有り難かった。また、今回さまざまな出会いがあった。ほかの受講者の方や、事務局の方、記録で入っていたNOOKの方々と出会えたこともとても大きなことだった。ここで培った出会いを枯らさぬように精進していきたいと思う。

[佐藤駿]

様々な表現媒体を持っている人たちと、濃密な時間を過ごせました。作品を言語化することの困難、着想を自分の外部に求めることの歯がゆさ、それでもやはり自分自身の内部から考えたいという野望。一カ月の東北キャンプを振り返り、「作家とは?」と問い直す。まずは「歴史」に触れていくことから始めてみようと思います。そこから徐々に私なりの言葉を編み出していければと…思います。

[西岡航]

僕は、一カ月間を故郷の福島と自 分自身に向き合う時間に費やしま した。とても辛かったです。ただ、 これから自分が福島県民として、ど ういう立ち位置に立つのか考える 上で、その土台になるようなものが 築けた気がします。参加前は、震災 をどこか他人事のように感じてい たけど、「震災は間違いなく僕自身 の問題である」とようやく思えまし た。きっとそう思うことから始まる のだと思います。

[水沼大地]

終わった直後はもう一度プレゼンをしたいと思った。言葉の伝わらなさに、僕こそ追記や弁明を重ねたかった。悔しかった。けれども、ここで自分が重ねた思考やブランは決して間違ってなかったと思うし、まだまだ考えて、形にしていきたいと思う。巡礼の日々は超刺激的でエキサイティングだった。同世代の表現者と今、このタイミングで出会えたことが何より心強い。これからもよろしく。

[中村大地

とても贅沢で刺激的な一カ月でした。あらゆる事が、ばばばっと繋がっていく感覚が何度も訪れ、へとへとになるときも多かったです。なにより、このぎゅっと詰め込まれた一カ月間を同じようにものすごいエネルギーをかけて向き合ってきた人たちがいる、あの場を共有した人が何人もいるという事実は、私のこれからにとって重要なことであるような気がしています。参加できて良かったです。

[野口竜平]

# 開催概要

# 媒介するもの 相馬千秋 Soma Chiaki

約30年前、私は岩手県盛岡市の小学校卒業文集に、ある作文を寄せています。恥ずかしい ので引用はしませんが、6年間の小学校生活の中で、自分という存在が、地球上はおろか銀 河系の中でいかに小さいか、自分が生きてきた時間が、人類はおろか宇宙の歴史の中でい かに一瞬であるかを学び、そのことについて絶望している、という内容のものでした。とは いえ、ただ絶望していても埒があかないので、中学生になったらそんな悩みを捨てて大きい 視野で頑張りたい、という楽観的な抱負で締めくくっているのですが。

今回のワークショップでは、何度となく、あの頃の感覚が蘇ってきました。いがらしみきお さんは「自分がなぜここに存在しているのかわからない。大人になっても誰も教えてくれな かった」ことに対するルサンチマンで漫画を描き続けていると仰っていました。大人は、子 供の頃「私はなぜここにこうしているの?」「人間はどこから来たの?」と親を問い詰め、不 安と好奇心で眠れない夜を過ごした経験を、いつしか忘れてしまいます。しかし、いがらし さんはそれを忘れるどころか、その不安を脅迫的に身体に抱え込み、創造の原動力として きたというのです。

満天の星空の下や、漆黒の海の前で、自分が存在する時間や空間の小ささ、寄る辺ない、根 拠のなさに絶望しながらも、その絶望感だけが唯一の存在証明になるような感覚。 昔の人 はこのような漠たる不安を、宗教やアニミズムの信仰の中で昇華してきたと考えられていま す。未来の人たちはこうした不安を払拭する、ドラえもんのポケットのようなテクノロジーを 手に入れるのかもしれません。さて、万能なる信仰もドラえもんポケットもない現代におい て、私たちはいかに、こうした根拠なき不安や絶望に向き合っていったらいいのでしょうか。

今回のワークショップで出てきたプランはどれも、こうした、私たちの存在を揺さぶる不安 に、それぞれの方法で誠実に向き合った結果の産物だと感じました。震災という断絶を人生 のかなり早い段階で経験した人たちが、それぞれの方法で、過去と未来を、死者と生者を、 人間と動物を、ここと他所を媒介し始めている、そのような感覚を強く持ちました。この媒介 力は、アートと呼ばれるものです。この媒介力が、10年後、いや100年後の誰かの不安に、 そっと寄り添い続けることを心から願っています。

文化庁委託事業「平成28年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業 みちのくアート巡礼キャンプ2016──東北から思考する、新進芸術家・企画者養成集中ワークショップ

2016年8月3日(水)-8月28日(日)

塩竈市杉村惇美術館

スタジオパーラー

グリーンツーリズム体験〈校舎の宿〉さんさん館

箱根山テラス 県庁南再エネビル

ディレクション 相馬千秋

清水翼 企画制作

藤井さゆり

清水仁 現地スタッフ

アートディレクション&デザイン -松井健太郎

ウェブ制作 -庄野祐輔

レポート編集・執筆 高橋創一

一般社団法人NOOK

文化庁

特定非営利活動法人芸術公社

特定非営利活動法人芸術公社

一般社団法人アーツグラウンド東北

ビルド・フルーガス





# みちのくアート巡礼キャンプ 2016

Michinoku Art Pilgrims Camp 2016

東北から思考する、 新進芸術家・企画者養成集中ワークショップ

レポートブック

Report Book

2016年9月30日発行

発行

特定非営利活動法人 芸術公社

編集·執筆

高橋創一

編集

藤井さゆり(芸術公社)

撮影

瀬尾夏美(一般社団法人NOOK)

長崎由幹(一般社団法人NOOK)

アートディレクション&デザイン

松井健太郎

印刷·製本 株式会社グラフィック

みちのくアート巡礼キャンプウェブサイト

http://art-junrei.jp/

芸術公社ウェブサイト

http://artscommons.asia/

お問い合わせ

contact@artscommons.asia

禁無断転載·複製

©2016 Arts Commons Tokyo All Rights Reserved.

Printed in Japan.

